

生の舞台演劇に接し初めて感激したのは中学三年の文化祭。同級生の女子三人がこの目的のために結成した劇団の公演。いや、すごいかった。

すっかり演劇びいきになったわたしは、高校に入って早速演劇部に入部した。初公演は安部公房の『暁』になった男で、「靴」役がブレイク。しかし演劇部は夏休みに空中分解。そこで親友たちと一年生だけで秋に新演劇部をつくった。

演劇部とはいかに練習を怠るものなのか、指導者がいないので、早朝のグラウンドを大声を出し続けながら走る。か、思いついたことをやって、とにかく上演することが重要だ。しやにむに池田鶴美の『三・三三三』を演じ、関するもう一つの物語』に挑戦した。

二年生の春には部員が十人以上に膨らんだ。いい気になって秋には『エーシカ』をやるぞと『極(げま)』を飛ばし、副役美の『スベイトものがたり』を取り上げ、その日の『エーシカ』で合宿まで舞台に乗せたが、なんと三時間の超大作。これ

ながらよくやったものだ。主演・演出・プロデュース・大道具・小道具・照明・音響、あらゆる役を舞台に臨む事柄を、誰にも習わず手探りで形にしていた。知らないで感心しい。

大学に入学したら、一年生に平田オリザがいて、劇団青年団擁護のためのオーディションを行なった。当然参加

### 「事件」は必ず起る



川村 龍俊

運良く合格、端役をもらった。本番まであなごしいらふきになって主役が大げげで入院。わたしは代役が緊急要請された。エーヤで引き受けた。理屈夜中までの稽古(けいこ)、稽古。無事に幕が上がった。幸い好評で、すぐに次回作が決まった。いつも思うのだが、企画が動き出したから幕上がるまでの間は、いろいろ

なる事件が起る。仲間の何人かは途中で絶たれていき、前売りチケットは割引の理には絶対売れない、直前には衣装が小道具が絶対壊れる。それでも、初日の幕は絶対に開けなければならぬ。

演劇とは多くの人が寄って来たこと何かを成すことであり、主催者たること主役たること、その一人の自己表現には

なり得ない。その時間を共有した多くの人が共同で作り出すものだ。

学生時代だけの演劇さんまいたったが、演劇で培った「人と一緒に無から有を生み出す方法」は社会人になってもこの身を離れない。血と肉の肉となっていく。就職した当時からこのように、総務部長になっても社長室長になっても

業本部長になっても社長になっても、新しい職場に移るたび、「なぜこの部署の人々は『立た字定はその理になるはずだ』と居て仕事をしてくれるのか?」という疑問が湧く。

わたしは、「立た字定は絶対にその理にならない」ということを知っている。仕事の醍醐味(だいごみ)とは、予定通りにならない状態に陥ったとき「それでも納期を守る」「顧客に満足していただくために何かをする」といふところではないのか。

「事件は必ず起る」といふのが、仕事における前提だろう。事件が起きないから起るのもあるんだが、起きた事件をどうにかするのには、そのしどろにかなったときには、どうも責任が持っていない。だから性懲りもなく、またやめたいなと思う。やめたいもするのだ。

製造業に従事して、毎日が演劇の舞台である。やめられませんか、これは。これは。きつぽ、あつぽ。

(愛知県川村大久保 福豊町三社社長)